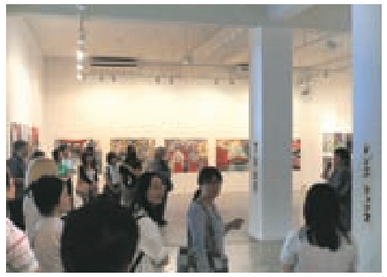
開催しました

FROM REMISEN #9
Karen Degett ＋ Regis Rizzo展

2007年6月1日［金］－13日［水］
12:00➜18:00（最終日は17:00まで）
会場：名古屋芸術大学アート＆デザインセンター



今回で9回目となるデンマーク、ブランデ市のレミセンアカデミーとの国際交流プロジェクト。

今年はスウェーデンからカレン・デゲットさんとフランスからレジス・リッツォさんが3週間の滞在制作を行い、本学で制作した作品を展示しました。

滞在中には特別講演も行われ、公開制作していたスタジオには毎日たくさんの学生が訪れていました。展覧会初日に開催したオープニングパーティーでは本学音楽学部学生のユニットによるミニコンサートも企画され、大盛況となりました。

予告 Future Event

名古屋芸術大学新任教員展

2007年7月6日［金］－11日［水］
12:00➜18:00（最終日は17:00まで）
会場：名古屋芸術大学アート＆デザインセンター

オープニングレセプション
2007年7月6日［金］
16:30—18:00

この度、アート＆デザインセンターでは新任教員展を開催の運びとなりました。第1回目となる今回は、2004年度以降本学に着任した教員7名の作品を展示いたします。

マイケル・シャイナー
（美術学部造形科ガラスコース教授）
吉本作次
（美術学部絵画科洋画コース教授）
扇 千花
（デザイン学部デザイン学科テキスタイルデザイン准教授）
駒井貞治
（デザイン学部デザイン学科スペースデザイン講師）
片岡祐司
（デザイン学部デザイン学科インダストリアルデザイン准教授）
櫃田珠実
（デザイン学部デザイン学科メディアコミュニケーション准教授）
永井瀧登
（デザイン学部デザイン学科ヴィジュアルデザイン講師）

アート&デザインセンター 6 EXHIBITION SCHEDULE 10 展覧会スケジュール

Open 12:00—18:00
（最終日は17:00まで）
日曜・祝祭日休館
7/26［木］—9/7［金］は夏期休館。

［入場無料］どなたでもご覧いただけます。

6/ 1金→ 6/13水	FROM REMISEN #9 Karen Degett + Regis Rizzo
6/15金→ 6/20水	書道演習作品展
6/22金→ 7/ 4水	since 大学院同時代表現研究作品展＋洋画コース3年選抜ドローイング展
7/ 6金→ 7/11水	名古屋芸術大学新任教員展
7/13金→ 7/18水	前期交換留学生作品展
7/20金→ 7/25水	素材。展
7/26木→ 9/ 7金	夏期休館
9/ 8土→ 9/14金	吉本作次展 *会期は変更になる場合があります
9/16日	あいち子ども芸術大学2007「文化芸術体験講座」～黒板家族を作ろう
9/19水→ 9/26水	ソフトスカルプチャーへ展 VII（仮）
9/28金→10/ 3水	造形科彫塑選択コース作品展
10/ 5金→10/17水	境界から見えるもの（仮）
10/19金→10/24水	ウェアラブル・テキスタイル展
10/26金→10/31水	版の方法論＃4
10/26金→10/31水	「見せ物」展（デザインと文化）
10/26金→10/31水	メダル・コンペ選抜展

Art & Design Center
名古屋芸術大学アート&デザインセンター　〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地 tel.0568-24-0325 tel/fax.0568-24-2897

編集後記

お気に入りの図書館に居心地の良い椅子があったら（たとえリサーチの締切に追われている時でも）幸福な時間が約束されます。

図書館ではありませんが、ヨーロッパの書店でよく見かけたのが、本を買いにきた人たちが店内のあちこちに置かれているソファや椅子に座り、じっくりと吟味しながら本を選んでいる光景です。実際には椅子がなくても長居をしてしまうのが書店なのですが、その環境はとてもうらやましく思いました。

現代はインターネットで何でも検索できる時代です。しかしやはり実際に本を手に取り、その手触りや装丁の美しさなどを味わう喜びにはかなわないと改めて感じました。

Ble　Vol.17
発行日　2007年6月15日
編集　江坂恵里子（アート＆デザインセンター）
発行　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地
Tel. 0568-24-0325　Fax. 0568-24-0326（代表）
Tel/Fax. 0568-24-2897（直通）
E-mail adc@nua.ac.jp
URL http://www.nua.ac.jp
デザイン　岩田知人（サンメッセ株式会社）
印刷　サンメッセ株式会社
2007 Printed in Japan

© Art & Design Center, Nagoya University of Arts

最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄犬山線（地下鉄鶴舞線乗り入れ）
徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行・準急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります

自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分。

大学基準協会認定マーク
本学は2006年4月に認証評価機関である大学基準協会の大学基準に適合と認定され、正会員になりました。
認定期間は2006年4月から2011年3月までです。
これによって法令化されている「第三者による認証評価」にも合格したことになります。

NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
名古屋芸術大学

B!e

2007 Vol.17
ART & DESIGN CENTER NEWS

特集 Library 「図書館を楽しむ」

電子図書館化の時代を迎えて

人類は知を文字で伝承するために、石板、粘土板、木簡、皮革などを用いてきたが、やがて最良の保存条件を満たすものとして紙が選ばれ、最終的に冊子本としての書物が主となって、知的財産を伝承してきた（その後、テープやマイクロフィルムなども導入されている）。オリジナル資料から手写本へ、さらに画期的な印刷術の発明によって活字文化が花開き、書物を通して文化は発展してきた。図書館はその知的財産を保存する場として重要な役割をになってきたし、現代もそれは変わらない。

ところが近年、コンピュータ技術の発展とともに、図書館のあり方に少しずつ変化が見えてきている。いわゆる電子図書館化である。

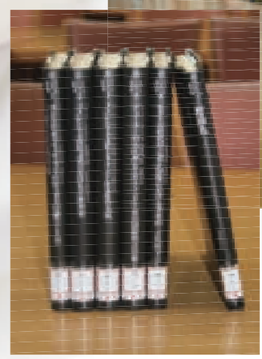
それはまず、国内、国外の図書館間をコンピュータで結ぶネットワーク化の波である。すでに大学図書館はいうに及ばず、多くの公共図書館が、その所蔵する文献をネット上で検索できるように供しており、NACSIS などの検索プログラムを通せば、どこの大学がどの図書を持っているかを瞬時に知ることができる。その上で、図書館のリファレンスサービスにより、文献の現物を取り寄せたり、コピーを依頼することができる。

また一方で、大量のデータを保存できる CD や DVD の媒体形式で、百科事典や六法全書など基本的文献が供給されるようになってきたことも見のがせない。これらは比較的安価で、劣化にも強く、画像も十分に収録でき、検索がたやすい。おまけに冊子本と比べると、物理的に小さくて薄く、近年収納スペースに悩む図書館にとっては、実に好都合である。また、学会誌などの電子媒体化も進んでおり、発表内容が PDF ファイルで配信されたり、CD 媒体などで供給されるようになってきている。

こうした時代の傾向をうまくとらえて、名古屋芸術大学も、その所蔵している価値ある知的財産をネット上の図書館に置いて、社会に向けて発信するという方針をとることもできるであろう（もちろんこの試みは部分的にはすでに行われているが）。両キャンパスの図書館に所蔵する文献はいうまでもなく、例えば、美術やデザインの作品を映像デジタル化したり（電子美術館）、音楽でも演奏作品やレッスン風景などを公開する（電子音楽館）ことも可能なはずである。もし電子図書館化に一定の意義があると判断できれば、それを限定つきで導入する価値はあろう。

それでも図書館は、資料調査をも含めて読書という知的営みのために設けられた場である。ゆったりとした時間、それなりに広い場所で、静かに安らいで読書に没頭する愉しさを保証するものでなければならない。書物の装丁、紙の手触り感、活字の多様さと美しさを十分に味わいつつ、アナログ的な喜びに満たされることは、知的であると同時に感性の動物である人間にとっては不可欠のものであろう。それをドイツ滞在中、フライブルク大学図書館で14世紀の神秘家タウラーのオリジナル手写本を読んでいたときに堪能した。その独特な書体の「写本41」には当時の歴史と文化の息づかいが籠められており、時代を超えてその中に浸ることができたのであった。この写本は、当時の教皇と皇帝間で激化していた対立抗争や深刻で悲惨なペスト禍など、日常の死のリアリティに直面しながらも、神に祝福された一度かぎりの豊かな人生を信仰の目で考察した、ひとりのドミニコ会士の「告白」の書でもあった。人生は美しく、生きるに値する。それがこの修道士の感懐であったが、それは同時に彼の確信でもあった。

名古屋芸術大学図書館長　橋本裕明



知と創造の震源としての図書館　　栗田秀法

（美術学部美術文化学科准教授・西キャンパス図書委員長）

小生が訪れて最も心が躍る個性的な図書館は、ロンドンにあるウォーバーグ(Warburg)研究所図書館。ここでは蔵書がすべて開架で、15－17世紀の貴重書を棚から棚へと自由に手にすることができる。訪れるたびにタイムスリップしたような静かな興奮に包まれる。

この蔵書の核は1934年にナチスの迫害を避けてハンブルクから移設されたもの。銀行家の家督を弟に譲り研究に打ち込んだヴァールブルクは近代自然科学の台頭とともに忘れされられた占星術や錬金術を初めとするルネサンス期の出版物を膨大に収集し、ルネサンスの知の宇宙をその蔵書で再現しようと夢見た。彼によって美術作品の隠れた意味を読み解く「イコノロジー」という手法が誕生し、この蔵書の周囲に集まった研究者たち（カッシーラー、パノフスキー、ウィントら）によりヴァールブルク学派という巨大な知の伝統が出現したことはよく知られている。皆さんおなじみのボッティチェリの《ヴィーナスの誕生》や《春》の秘密を読み解くきっかけをつかんだのも実はヴァールブルクなのである。

西キャンパスでは、学習用の参考図書の充実に加え、専任教員の方々には専門図書の選書をお願いしている。まだまださささやかではあるが、西キャンパス図書館の小宇宙が創造的発想の種となって優れたクリエイターや研究者の卵たちを刺激する場となることを願ってやまない。

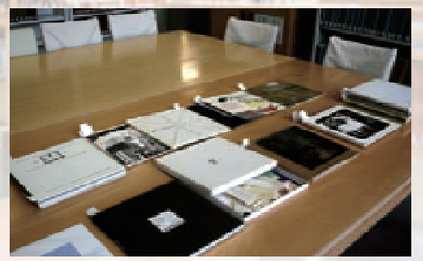
推薦図書

「ヴァールブルク著作集」全7巻 ありな書房
ヴァールブルク『異教的ルネサンス』ちくま学芸文庫
ゴンブリッチ『アビ・ヴァールブルク伝 ある知的生涯』晶文社
山口昌男『本の神話学』中公文庫

特集 Library 「図書館を楽しむ」

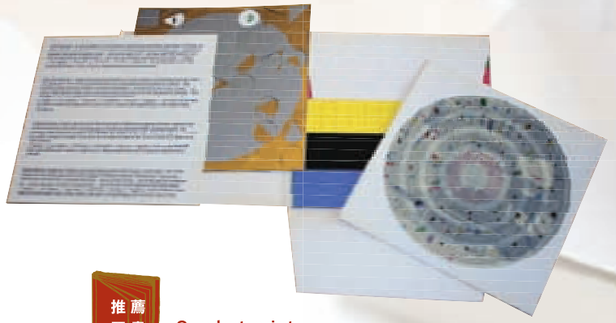
神田古書街が私の図書館だった　　須田照子

（デザイン学部デザイン学科教授）



50's神田神保町にあった中学校に通っていた頃の通学路、高校時代の格好の寄り道ルート、長じては散歩道になった神田古書街、今でも上京となると必ず足を運ぶ。当時、手頃な図書館などなかった時代、この街のすべてが私の図書館だった。大型書店や小さな専門店が軒を連ね、新刊から古本・古典籍からペーパーバック、一般本から学術資料、洋書・漢書からカタログ・チラシまで、何もかも奥の奥まで、ただ本の世界が広がっていた。まだ何も得ていない、持っていない私が本の背をひたすら眺め、ページをそっと繰っている。未知の国を探訪しているような喜びがあった。表裏の無数の本屋、出版社、映画館そして喫茶店、大学も、書籍と相性のいい環境は、過去の蓄積や最新の波動を探してうろつくには、ぴったりで各種の図書館が整備された今でもこれは変わらない。

いまや、筋金入りの本読み人になった私ではあるが、蒐集家にはならなかった。つまり手元に本を置く事に拘らない。必然的に図書館の本を読む人になった。もう何十年も各地の図書館が私の本棚である。さてさて、足腰が弱ってきたら、図書館の真髄ともいうべきレファレンス機能、全世界の関連施設のデータベースとリンクしてのネット索引や調査サービスを使って書籍や資料を読む、自宅に貸し出しを頼もう。やがて図書館にしか存在しなくなる古い雑誌、幼い日に出会った絵本、青春の書を提供してくれるに違いない。本は私の見果てぬ夢である。



推薦図書

Quadrat-print
（20年間に渡りアーティスト達が印刷表現の可能性に挑んだ貴重な文化遺産）
※この本は西キャンパスの図書館に収蔵されていますが、貴重図書のため、閲覧希望者は担当教員に許可を取り、図書館で申請書に記入後閲覧してください。

レビュー REVIEW レポート

第5回夢広場はるひ絵画ビエンナーレ

2007年3月27日－ 5月20日
はるひ美術館
／愛知県西春日井郡春日町

田中 桂「kittung khun」

北名古屋市のお隣、春日町が二年に一度の絵画公募展を始めたのが1999年。はや5回目を数えた今回で、その存在意義と質が明確になってきた。地味ながら着実な開催を頼もしく思っていたが、小さな町が税金で全国公募展を開催していくには多くの課題があるのも現実。「現代絵画はよくわからん」なんて誹りもあるだろうし、町民の理解を得ていくには、まだまだ時間がかかるのかもしれない。

しかし少なくとも本学にとっては、在学・卒業生の着実な成長ぶりを確認できる、良質な機会といえる。こうした若手作家の登竜門としての信用度は、その審査員の顔ぶれに負うところが大きい。本学教授・浅野徹氏をはじめ中村英樹氏、山脇一夫氏の評論家に加え、画家の櫃田伸也氏と辰野登恵子氏の5人が、無記名の作品を厳正に審査してきた。

第5回展では過去最多470点が応募され、28点の入賞作が発表された。この春に本学大学院美術研究科を修了した田中桂さんが奨励賞を受賞。在学中から女性像に取組んできた彼女が、真直ぐに迷いのないスタイルを発信できた快心作だ。この評価は、大きな自信と制作意志への再確認を促したに違いない。

美術学部美術文化学科准教授　高橋綾子

常滑アート＆デザイン工場「利助、三信、佐平治」

2007年4月28日－ 5月6日
rin'・名古屋芸術大学常滑工房ほか／愛知県常滑市

2007年の黄金週間、愛知県常滑市にて、筆者も参加しているrin' という非営利の任意団体と名古屋芸術大学との共催で、展覧会『常滑アート＆デザイン工場「利助、三信、佐平治」』が開催され、3600名を越える来場者でにぎわった。

会場は、常滑市の観光コース「やきもの散歩道」途上に点在する「rin'」「名古屋芸術大学常滑工房」「金太郎窯」「常滑屋」「スペースとこなべ」というギャラリーやショップ、工房として再利用されている元焼きもの工場を使い、これらを巡り歩くように設定されていた。

「やきもの散歩道」は、小高い丘の上、路地が細く入り組んだ迷路のような一帯に、使われなくなった焼きもの工場のレンガ煙突や窯跡などが多く残る場所で、かつて盛んだった製陶業が衰退したあとの寂れた風景が魅力の場所である。産業遺産としての、この地域特有の景観を保全し観光資源として再利用しようとする動きがある一方、景観を度外視した開発なども進んでいる。

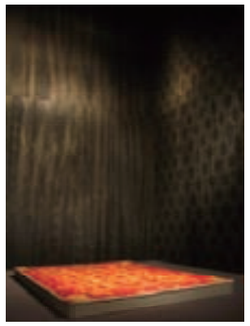
このようななかで、これからの「景観」を問うものとして本学の教員、学生、他大学の教員や作家などの手による「デザイン」「現代美術」「考現学」「映像」「写真」などの作品や研究成果が発表された。設定されたテーマは固い印象を受けるが、展覧会は古い工場の中を巡るように構成された会場とともにそれぞれの作品においても見て触れて楽しめる要素が盛り込まれ、地域の住民や観光客などにも好評を博していた。

本企画をきっかけに今後、より規模の大きな企画を望む声も地域の内外からあがりはじめている。

名古屋芸術大学非常勤講師　坂倉 守

森としての絵画：「絵」の中で考える

2007年2月10日－ 3月25日
岡崎美術博物館／愛知県岡崎市



染谷 亜里可「soak」

本展を見て思い出したものがある。子供の玩具で「マジック・メモ」というやつ。簡易黒板のような形状の表面に尖った棒で絵や文字を描くことができるが、表面のビニールをめくると描いたものが消去され、その上から再度新たな絵が描ける。近年における脳科学の進化は目覚ましく　人間の記憶と脳の関係さえ解明されつつあるが、そんな実証的データの登場するずっと以前に、フロイトは人間の記憶が含蓄される仕組みをこの「マジック・メモ」をモデルに考えていた。染谷亜里可による不織布　にモーターオイルをしみ込ませた作品は、構造的には全くこの玩具と異なるが、スポンジ状の物体にしみ込んだ液体がマントル対流のごとく時間とともに移動する様は、「マジック・メモ」の亜種として記憶の容器のようにとらえることもできる。染谷の作品がこの展覧会の基調低音（もしくは原器）のように感じられるのは、近年の画家達が、記憶あるいはアーカイブをどのように表象するかという問題に取り組んできた結果の現れのような気がする。ジャック・デリダは、"Mal d' archive"というテキストの中で、フロイトにとってのアーカイブを題材に、アーカイブというものの本質は、その「起源」と「管理」だと定義している。岡崎乾二郎の一連の絵画は、彼がまず「アーカイブとは何か」という定義からはじめて、それを（意識的／無意識的）に管理するオペレーションとして「絵画」を制作しているが故に、本展の中でも最も先鋭的な仕事になっていると思う。本展における展示の分類やカテゴリーには個人的に異論もあるが、現代の絵画の様相を総覧するという意味において概ね評価のできる展示であった。

岡崎 乾二郎 作品展示風景
写真提供：岡崎美術博物館

デザイン学部デザイン学科准教授　津田佳紀

RELAY ESSAY

「笑顔で心身元気に!!」…… 大橋 廣

笑いには不思議な力がある。

ストレスを解消し体調の乱れも修復してくれる。経験的にそう感じている人は多いだろう。実際に最近は、その効用を裏付ける実験、報告が増えている。その一部を紹介します。

まず橋本慶男岐阜聖徳学園大教授によれば、笑いが体に及ぼす効用は大きく分けて３つある。１つは前頭葉が刺激されることによる免疫活性ホルモンの分泌。健康な人でも１日に3000～5000個発生するガン細胞を退治してくれる。２つ目はベータエンドルフィンが分泌され、不安や恐怖による痛みを緩和する脳内麻薬効果。３つ目は運動効果で20秒の大笑いは３分間全力でボートこぎをするのに匹敵する運動量であり、ダイエット効果もあるとしている。

ほかに医学の分野では、医療法人回生会宝塚病院が関西大学「甲山落語研究会」と組んで「健康寄席」が開かれ、落語を聞く前後で唾液に含まれるホルモン成分を測定し、ストレスが低下することで血圧や血糖値を下げ、心筋梗塞など心臓疾患の予防効果があることが確認されている。また、岡山県倉敷市の伊丹仁朗医師と大阪市の昇幹夫医師がガンなどの患者が漫才で大笑いした後に採血し、ガン細胞を攻撃するNK細胞の増加が高まったことが分かった。

筑波大の村上和雄名誉教授が2001年に糖尿病患者に行なった実験も有名だ。昼食後、１日目は難しい講義、２日目はB&Bの漫才を聞き血糖値を調べると、２日目は血糖値の上昇が抑制されていた。実験結果がニュースで伝えられると大学に「B&B」という薬はどこで買えるのかと尋ねる電話が殺到した。

教育の分野では、東京薬科大学で昨年４月より半年間「笑い」をテーマにした一般教養の講義が行なわれた。プロの芸人や放送作家が協力し、受講生に人を笑わせる方法や必要性を考えさせた。企画した野水基義教授は約10年アメリカやカナダで研究生活を送った。帰国後、日本の若者は他人と話すことが苦手なことに気付き、人間関係の潤滑油として笑いを役立ててもらうのが狙いとしている。他には教育に笑いを取り入れようと、全国の教員らが名を連ねる「お笑い教師同盟」もある。現在は三重県教育委員会の指導主事で、国語のベテラン教師山川晃史先生もその一員で、笑いが自然に生まれる雰囲気を作ることは授業がうまくいく条件の１つで、教室が暖まり、場が和やかになると力を込める。

癒しの分野では昨年テレビでも放送された入院生活が長く続く子ども達を癒す「クリニカル・クラウン」直訳すれば「臨床道化師」のケイさんとアイアイさんも有名だ。三重大学医学部付属病院で、昨年３月より毎月１回訪問し、子ども達と病室で遊び、笑いを提供している。病院は子ども達が外から来る人に刺激を受け、笑うことで怖い検査や痛い注射も忘れ、笑顔が戻ってくると歓迎している。

美術学部教養部会教授(健康科学)